

中国海軍 J-15 艦載機の生産状況

漢和防務評論 20140220（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

クリミア情勢が世界を震撼させています。かつての米ソ冷戦時代初期に戻った感がありますが、当時と大きく異なるところは、西側とロシアの力の差です。ロシアは味方を求めています。中国とは、今まで軍事技術などを巡ってある程度距離を置いてきましたが、状況によってはより接近する可能性があります。中国も世界が注視しているので慎重な対応が求められています。日本にとっての問題は、同盟国である米国の問題処理の方法であり、米国が対中、対露融和策を採ることになれば、日本の防衛政策にも大きな影響が出ると思います。

KDR 瀋陽特電：

瀋陽航空機会社の消息筋は、「2012 年現在、J-15 の大量生産は開始されていない」と述べた。同機は、2009 年 8 月に初飛行した。2013 年 8 月に写真が公開された J-15 の 554 及び 555 号機の写真は、海軍の標準塗装がなされていた。中国メディアは、J-15 はすでに正式に海軍に配備されたと報道した。500 番台のもう 1 機は 556 号機である。これらの機体が出現する前は、黄色に塗装された J-15 が空母“遼寧”艦上で実験を行っていた。塗装が改められても使用するエンジンは依然として AL-31F 型である。これらの機体が 2013 年に生産された前期量産型なのか、或いは元からあった機体の塗装だけを変えたのかどうかは分からない。前期型の J-15 が依然として AL-31F エンジンを使用しているということは、国産の WS-10A エンジンが艦載機に装備するには未だ信頼性が不足していることを示している。これらの動向から判断すると、元々試験飛行に使われていた J-15 はすでに正式に海軍に移管されたようだ。2013 年 5 月には、中国海軍艦載機航空兵部隊が正式に成立した。

KDR がすでに報道したが、胡蘆島の海軍試験飛行センターに建設された 24 個の格納庫を見ると、1 個連隊フル編制の J-15 の機数は 24 機である。

J-11B、J-11BS の生産速度から判断すると、瀋陽で生産されるロシア式戦闘機の年間生産機数は、おおむね 24 乃至 26 機（1 個連隊規模）であるようだ。これは 2011 年以前の状況であり、生産ラインは 1 本しかない。この理由は、部品の補給が追従できないためである可能性が極めて高い。

ソ連時代、及び現ロシアの復活初期、“共産主義青年城”の生産ラインは、SU-27とSU-33の生産ラインは別であった。SU-33用に専用の生産ラインがあったのは、両機種の上に設計上大きな違いがあったからである。したがって2013年から2014年にかけて瀋陽航空機会社にJ-15用に新たな生産ラインが設けられるかどうか特に注目する必要がある。生産ラインが1本のままだと、J-15の生産はJ-16或いはJ-11BSの生産から影響を受けることになる。

しかし中国国産空母は建造開始から海上試験を経て正式に就役するまでには、少なくとも10年は要することを考慮すると、2個連隊分のJ-15の生産に要する期間が少なく見積もっても3乃至4年のかかるとしても現段階で生産速度に問題はない。2017乃至2018年には、瀋陽航空機会社のJ-15生産機数が48機になる。

以上